Nippon Association for Libraries

《論文》

010.2
〈ポーリー，クリスティン(Pawley, Christine)〉
〈図書館－歴史－研究〉

クリスティン・ポーリーと図書館史研究

吉田右子，川崎良孝

Christine Pawley and the Study of Library History, by YOSHIDA Yuko and KAWASAKI Yoshitaka.

本稿はアメリカ公立図書館史，図書館情報学教育に関心を持つクリスティン・ポーリーの図書館史研究の全体像を明らかにすることを目的とする。本稿ではポーリーの研究成果を，プリント・カルチャーと公立図書館の歴史的研究，研究方法論，図書館情報学の批判的研究という3つの領域に分けて検討した。ポーリーの図書館研究は，プリント・カルチャーを射程に入れることで図書館史研究の領域を拡張し，図書館に対する批判的視点を図書館情報学および図書館学教育に照射することで浮かび上がる論点を中心課題にしていることが明らかになった。

1．はじめに：ポーリーと研究業績

クリスティン・ポーリー(Christine Pawley) は，ウィスコンシン大学マディソン校(University of Wisconsin-Madison) 図書館情報学研究科の教授兼科長であり，現代アメリカ・プリント・カルチャー史センター(Center for the History of Print Culture in Modern America) の所長である。2006年にウィスコンシン大学へ移籍する前はアイオワ大学図書館情報学研究科の教授を務め，書籍研究センター(Center for the Book) のセンター長を兼務していた。ポーリーの研究領域は，プリント・カルチャー，[1] アメリカ公立図書館史，図書館情報学教育などである。

図書館史研究においては，ハリス(Michael H. Harris) が民主主義機関としての図書館像にかかわる，主流文化中心の固定的な認識への批判的視座を提示し，その後のアメリカ公立図書館史研究は，ハリスの「修正解釈」を踏まえて展開されてきた。[2] 1980年代以降，アメリカ公立書館史研究を先導してきたウィーガンド(Wayne A. Wiegand) は，修正解釈を踏まえ，図書館史研究の対象を読書や多様な読書機関に拡張した上で，それらの様態を批判的に分析するプリント・カルチャー研究を主張している。[3] ウィーガンドから博士論文の指導を受けたポーリーの研究は，ウィーガンドの影響を強く受けている。プリント・カルチャーと図書館の接点となる領域で精力的に研究を展開しているポーリーの研究をみていくことで，アメリカにおける図書館史の批判的研究の到達点を浮かび上がらせることが可能となる。

ポーリーの主要な業績を一覧にすると次のようになる。[4]

①1996[P－1：博士論文]「中部辺境地域での読書：アイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー，1870年－1900年」
②1998[C－1：雑誌論文]「ヘゲモニーの侍女：「階級という視座」からみた図書館情報学カリキュラム」
③1998[P－2：雑誌論文]「何をどう読むのか：1870年から1900年のアイオワ州オーセージの若者の読書に関する社会基盤」
④1998[P－3：単行書論文]「ビリヤードより良いもの：1890年から1895年のアイオワ州オーセージにおける読書と公共図書館」
⑤2000[P－4：雑誌論文]「アクセスへの唱導：

2011年1月3日受理
よしだ　ゆうこ　筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
かわさき　よしたか　京都大学大学院教育学研究科

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

ルーティ・スターンズとウィスコンシン図書館委員会の巡回文庫，1894年－1914年」

⑥2001[P－5：単著]「中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー」

⑦2001[P－6：雑誌論文]「読書対赤い雄牛：民主主義の文化的構築と冷戦期ウィスコンシンの公立図書館」

⑧2002[M－1：雑誌論文]「意義を見出す：現実の読者と特定の読書コミュニティ」

⑨2003[M－2：単行書論文]「『文化の使徒』を読む：「図書館史」の政治と歴史的方法論」

⑩2003[M－3：雑誌論文]「批判的実践と関係性としての歴史研究：アイオワ・プロジェクトにおけるカーネギー図書館」

⑪2003[C－2：雑誌論文]「情報リテラシー：矛盾した結合」

⑫2005[C－3：雑誌論文]「ゴーマンの防御：ジェンダーと大げさな嘘」

⑬2005[C－4：雑誌論文]「図書館情報学カリキュラムにおける歴史：議論の概要」

⑭2006[M－4：雑誌論文]「読者の抽出：図書館の経験」

⑮2006[P－7：雑誌論文]「人種・読書・アイオワ州デモインの愛読者クラブ」

⑯2006[C－5：雑誌論文]「不平等な遺産：図書館情報学カリキュラムにおける人種と多文化主義」

⑰2006[P－8：単行書論文]「優良児・できの悪い赤ん坊：女性・活字文化・ドア・キウォーニー地域図書館　1950－1952年」

⑱2007[P－9：単行書論文]「ブックモービルのバイオレンス：アメリカ公立図書館と読者の創出」

⑲2008[M－5：雑誌論文]「小規模財源での成功：現代アメリカ・プリント・カルチャー史研究センター」

⑳2009[M－6：雑誌論文]「市場モデルと抵抗を超えて：読書の歴史における中間層としての機関」

㉑2010[P－10：単著]「読書の場所：リテラシー・デモクラシー・冷戦期のアメリカ公立図書館」

注）「P」はプリント・カルチャー／公立図書館の歴史研究，「M」は方法論，「C」は図書館情報学の批判的研究に関する文献である。

本稿で上記の業績を考察するに当たってポーリーの研究成果を，プリント・カルチャー／公立図書館の歴史的研究(P)，研究方法論を扱った論文(M)，図書館情報学の批判的研究(C)，という3つの領域に分けて考えていくことにしたい。1番目は実証的手法を用いた歴史研究が該当する。2番目は図書館およびプリント・カルチャーをどのように研究するのかという方法論の部分に焦点を当てた論文であり，図書館への批判的視座という点において，第3の領域にもかかわってくる。第3番目は図書館に対する批判的視点を，研究領域である図書館情報学と実践領域である図書館学教育に照射することによって，浮かび上がる課題や論点を検討する領域である。

本論文は，この3つの領域の代表的な研究をたどりながら，ポーリーの図書館情報学研究の全体像を明らかにすることを目的とする。

2．プリント・カルチャー／公立図書館の歴史研究

ポーリーの図書館史研究／プリント・カルチャーの研究業績は，2つのテーマに大別することができる。1つはアイオワ州オーセージ・コミュニティの読書を扱った研究であり，ポーリーの歴史研究の出発点となっている。

ポーリーは1996年に博士論文『中部辺境地域での読書：アイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー，1870年－1900年』(P－1）を執筆し，この博士論文は，2001年に若干内容を変更して出版され(P－5)。またポーリーは博士論文の分析結果を用いて「何をどう読むのか」(P－2）と「ビリヤードより良いもの」(P－3）という2つの論文を執筆した。2006年の論文「人種・読書・アイオワ州デモインの愛読者クラブ」(P－7）は，コミュニティの読書グループを扱った研究である。

ポーリーのプリント・カルチャー／公立図書館研究のもう1つの柱はウィスコンシン州を対象とした巡回文庫とブックモービル活動をテーマとする研究である。「アクセスへの唱導」(P－4)，「読書対赤い雄牛」(P－6)，「優良児・できの悪い赤ん坊」(P－8)，「ブックモービルのバイオレンス」(P－9）が該当する。そしてこれらの論文を含めたウィスコ

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

ンシン州ドア半島の住民の読書と図書館をめぐる俯瞰図を描き出した『読書の場所』(P－10) を2010年に上梓した。

2.1 『中部辺境地域での読書：アイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー，1870年－1900年』

2.1.1 プリント・カルチャー研究の出発点

ポーリーがウィスコンシン大学に博士号請求論文『中部辺境地域での読書：アイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー，1870年－1900年』(P－1)[5] を提出したのは1996年であり，この博士論文は2001年にマサチューセッツ大学出版局から『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』(P－5) との書名で刊行されている。[6] 章立てなどに少し変化があるものの，ほぼ博士論文の記述が踏襲されている。

ポーリーは教育，宗教生活，読書クラブなどの原資料を分析して，一般住民のプリント資料の使用を解明している。資料としては図書，新聞，雑誌はもちろんプログラム，カタログ，ポスター，お知らせ，案内や招待カード，切符など，それに図書館の資料購入記録や貸出記録も活用している。そしてプリント資料と日常生活が交わる場としては，職場，教会，学校，家庭，自発的団体，それに図書館などを取り上げた。

第1章「『プリント資料を求めて』：中部辺境での読書」では，19世紀後半のオーセージにおけるプリント資料の入手方法，読書についての当時の態度などを記し，さらにオーセージでの階級，民族，宗教，政治について記している。1870年から1900年のあいだに，オーセージは入植地から起業や専門職に携わる多様な住民から構成されるコミュニティになり，上層には英語を母語とするプロテスタントが，下層には最近の移民労働者，特にルター派の住民がいた。禁酒という中産階級の理想に応じて，教会，学校，自発的グループ，それに公立図書館が，社会的な交わりの場としての酒場に取って代わった。階級，宗教，民族，ジェンダー，年齢がコミュニティの社会的基盤と市民のアイデンティティを形成し，これらが住民の読書に影響を与える一方で，読書が社会的基盤と市民のアイデンティティの育成に跳ね返り，相互関係にあった。[7]

第2章「『世界への窓』：地元新聞」は，最も読まれていたプリント資料と思われる地元の新聞の記事の内容，新聞の対象者，寄稿者，新聞自体の役割の把握とそうした役割の実行方法などを明らかにしている。地元新聞は「真実」や「正確さ」を犠牲にしてまでも，ビジネス職や専門職の利益を代弁しており，新聞を担い新聞に寄稿しているのは，英語を母語とするプロテスタントの白人男性で，豊かな人びとであった。英語が母語でない移民，貧しい人，アフリカ系アメリカ人などの関心は疎外され，女性についてはヴィクトリア朝時代の女性像が強調された。地元新聞は，共通の価値でコミュニティを定義づける役割を果たすと同時に，そこから排除される住民との境界を設定した。また新聞同士も敵対的な関係にあったため，住民は新聞を読み記事に賛同／拒否することで，コミュニティにおける特定の社会的価値の設定に関わっていた。[8]

第3章「『天国の前触れ』：学校と教会での読書」では学校と教会，第4章「『愛と友愛の関係』：自発的団体」では自発的団体での読書を扱っている。前者については公立学校などの生徒が用いた読書資料を分析し，また有力な教師の読書観を検討した。さらに教会や日曜学校での読書資料の配付を扱い，世俗の日常生活が織り込まれた宗教的世界観についても検討している。

これらの章ではグループ読書が取り上げられている。教会でのグループ読書は，自派の宗教的価値を補強し，他派との距離を開くことになったし，そこに人種，民族，ジェンダーのアイデンティティの補強が加わったりした。学校でのグループ読書は教員による統制，グループへの一体感を持たせるが，教科書などの教材の導入は同時に個人的な楽しみと達成のための源としての読書も奨励することになる。学校・教会での読書は中産階級の道徳的性格の獲得を意味し，プリント資料は既定のプロテスタントの伝統的価値を補強すると同時に，個人的な読書の喜びを味わったり，自己向上を促して個人の知的成長をもたらす手段でもあった。[9]

第5章「『利益と祝福』：セージ図書館」では，オーセージ図書館での図書登録記録と貸出記録，国勢調査データを関連づけることで，地元の公立図書館の利用者を分析し，利用者の年齢，ジェンダー，階級，民族，宗派別構成を解明している。英国に源を持つプロテスタント教会の教会員，若者，それに

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

中産階級が，図書館をもっともよく利用しているが，同時に男性，高齢者，経済的に豊かでない住民も，かなり図書館を利用していた。[10)]

第6章「『図書館での読書』：利用者による読書資料の選択」は，個々の利用者による実際の読書資料の選択を扱った章で，博士論文の最も中核的な部分である。図書館界や文化的識者は公立図書館の役割として教育的な役割やハイカルチャーの役割を掲げるが，実際の貸出記録の分析はこうした崇高な目的とは異なった結果になっている。図書選択者は利用者の好みにしたがって図書を選択し，ロマンスといった類の図書が多くなっている。また貸出された図書は基本的に，図書館利用者の圧倒的多数が支持するプロテスタント的な理念や中産階級の価値を反映していた。さらにその内容をミクロに分析すると，ジェンダーや年齢に関わる読書の通説が必ずしも当てはまらない多様な読書様態が浮かび上がってくる。[11)]

2.1.2 考察：コミュニティの読書様態の解明

前項で見てきた『中部辺境地域での読書：アイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー，1890年－1900年』は19世紀後半のアイオワ州オーセージを対象として，コミュニティにおける読書の様態を総合的に解明したものであり，ポーリーの研究関心と方法論の特徴が明確に現れている。研究関心の点では，図書館に留まらず「コミュニティの読書」という包括的なテーマが設定されていること，研究方法の上では，一次史料を用いて実証的な分析がなされている点が重要である。

読書の実践は図書館内における最も重要な営為である。しかしながらこれまでの図書館研究は，読書を図書館サービスの提供側の視点からとらえるにとどまってきた。つまり利用者に対して図書館が提供する様々なサービス，たとえば読書振興の方策，読書相談，児童を対象とした読書指導に関して研究が行われてきたものの，利用統計にかかわるマクロな調査は別として，サービス対象となる利用者側の読書行為については，ほとんど分析されてこなかったのである。

一方，他分野では読書実践にかかわる研究が活発に行われてきた。たとえば読書をめぐる読者の心理的な問題については読書科学や心理学の領域が，読書の内容や書物の受容については文学の領域における読者論やメディア論が，読書の歴史については歴史学がそれぞれ詳細な分析を行ってきた。一方，図書館は読書行為を中心に抱えた機関でありながら，図書館学が読書行為自体に切り込むことはほとんどなかったのである。それゆえポーリーが図書館における利用者の読書実践をはじめて真正面から取り上げ，これまで図書館サービスの対象者として図書館側からとらえられてきた利用者を，利用者側から描いた点は，図書館情報学研究への貢献として認められる。ポーリーの研究成果は次の3点から評価できる。(1)図書館の中核的活動である読書実践を，実証的に明らかにしたこと，(2)図書館を含め研究対象をコミュニティの読書空間に拡張することで，図書館情報学の領域そのものを拡張したこと，(3)読書実践をめぐる研究において，図書館学と他領域を架橋したことである。

ポーリーは分析対象となったオーセージ・コミュニティの読書をめぐる空間を，学校教育，公立図書館，教会活動に関わる読書や退役軍人協会(Grand Army of the Republic)，女性禁酒同盟(Woman's Christian Temperance Union：WCTU)，女性参政権協会(Woman Suffrage Society) など，地元団体や地元の新聞社など複数機関の活動が交錯する場としてとらえている。また読書実践を行う利用者の属性を一次史料を用いて突き止め，利用者のジェンダー・階級・出身地・宗教，政治的立場などの多様性を明らかにした。コミュニティに存在する複数の読書機会と読み手の多様性を重ねることで，コミュニティの読書実践の全体像を浮かび上がらせることが，ポーリーの研究戦略であったといえよう。

ポーリーは「高級文化対低級文化」，「男性の読書対女性の読書」，「エリートの読書対非エリートの読書」といった既存の図書館利用者を説明する言説が，現実の読書の状況と乖離していることを明らかにした。そして対立的にとらえられてきたこれらの要素が，読書行為の中で排他的に作用するのではなく，個人の中で相互に交換可能な柔軟な条件となっていることが示された。つまりポーリーの研究において，利用者は高級文化，低級文化を自由に行き来する自由な存在として描かれている。プリント・カルチャー史／図書館史研究では，ジェンダー，階級，宗教，民族といった分析軸が，既存の図書館研究を実証的に批判するために使われているのであるが，そうした方法論上の試みもポーリーの研究成果とと

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

らえてよいだろう。

ポーリーの研究についての視点や問題意識について考えていく上で，博士論文に書き込まれた基本的な研究の視座が役立つ。ポーリーは博士論文の「はじめに」の冒頭で，シャルチェ(Roger Chartier)『書物の秩序』から以下の文を抜粋して掲げている。[12]

> 読書はいつも所作，空間，習慣のうちに具象化するものであると見なす必要がある。……読み方の歴史は……読者共同体や読書の伝統的方式の各々の特色を明らかにしなければならない。

読書は日常的な行為であり，現在では普遍的な行為ともいえるが，その実態，とりわけごく普通の人びとの読書実態については，ほとんど解明されていない。ポーリーの関心はシャルチェがいう読者共同体の解明にある。[13]

さらにポーリーは1970年代から興隆してきたヴォルフガング・イーザー(Wolfgang Iser) などの読者反応理論を援用し，受身的な読者から積極的な読者へという捉え方の移行を指摘している。[14]スタンリー・フィッシュ(Stanley Fish) もまたテクストの解釈について，研究対象をテクストや個々の読者よりも，社会的グループへ移行すること強調した。[15]ここでは「解釈共同体」という考えが重視される。

ポーリーは自身が研究を行う19世紀について，アントニオ・グラムシ(Antonio Gramsci)(1891～1937)の社会理論を適用する。グラムシは，近代国家が直接支配する構成装置としての「政治社会」と，支配階級が知的・道徳的指導を通して被支配階級の自発的同意を獲得するヘゲモニー装置としての「市民社会」とを区別し，それを統一的に把握しようとした。ポーリーはそうした支配が，少なくとも部分的にはプリント資料の生産とアクセスへのコントロールによってなされていると把握する。しかしポーリーは一方では，この支配的なイデオロギーの過度の強調を戒めている。というのは被支配者自体が選択や統制の空間を生成していることを見逃してしまうからである。[16]

資本主義イデオロギーが支配を達成する１つの方式として，制度の創出がある。会社，銀行，保険会社といった経済的な制度，教会，学校，大学といった社会的制度は，産業資本主義国家の基盤の一部として，階級形成の過程で発展してきた。20世紀の図書館は19世紀の産業化と階級形成から出現してきたものである。[17]中産階級は強み(asset) を制度から引き出した。こうした「強み」は物理的な資産だけでなく，技量，教育，組織，道徳を含んでいた。19世紀末になると，中産階級はこうした一連の「強み」を維持するために，多くの活動に参加を開始し，そこには専門的およびビジネスの日常的業務に携わること，および教会・公立学校の運営などのコミュニティへの参画が含まれていた。ここでポーリーが強調したのは，階級の形成と再生産は人びとの日常生活のなかで行われるという点であり，それゆえ階級を固定的な範疇として捉えることではなく，関係性のなかでみていくことが重要なのである。[18]

ポーリーによると，これまでのプリント・カルチャーの歴史研究は，文学的な評価が高い歴史的な作品のテクスト自体の解釈か，あるいは製紙，製本，印刷技術など図書の物理的側面の研究(book arts) に限定されていた。[19]当然そうした研究にポーリーは批判的であり，階級やジェンダーを視野に入れつつ，シャルチェがいう読者共同体を浮かび上がらせようとする試みが『中部辺境地域での読書：19世紀末のアイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー』であった。

2.2 『読書の場所：リテラシー，デモクラシー，冷戦期アメリカの公立図書館』

2.2.1 プリント・カルチャー研究の結実

ポーリーが博士論文完成後に取り組んだ研究は，ウィスコンシン州の公立図書館史であった。2010年に刊行された『読書の場所』(P－10) は，10年にわたるプリント・カルチャー／図書館史研究の成果である。[20]

同書では研究方法として「ウィスコンシン歴史協会文書」(Wisconsin Historical Society Archives)，「ドア・キウォーニー地域図書館実証実験 1950－1952」(Door-Kewaunee Regional Library Demonstration, 1950－1952) に含まれる図書館の貸出記録5,822件(内227件は判読不可能であったためデータとして使用せず) の分析および関係者26名へのインタビューが用いられている。[21]アメリカの特定地域の「普通のアメリカ人」(ordinary Americans) の読書実践を明らかにするためには，これらの一次史料を分析することが最も有効である。[22]

第１章「リテラシー論争：議論と危機」では，研

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

究の背景と研究方法が論じられている。1949年9月にウィスコンシン州議会はウィスコンシン州公立図書館委員会(Wisconsin Free Library Commission 以下 WFLC) が既存の図書館6館と2台のブックモービルを使って，農村地域の図書館サービスに関する実証実験を行うことを可決し，1950年から3年間にわたりドア・カウンティ，キウォーニー・カウンティは図書館サービスを享受した。図書館サービスは成功を収めたにも関わらず，3年後に行われた住民投票でドア・カウンティは図書館の存続を決め，キウォーニー・カウンティは廃止を決定した。[23] 第1章では図書館支持派と非支持派の住民対立，図書館サービスを仕掛けた WFLC，政治家，教育者，司書の目的や理念が交差するコミュニティの読書をめぐる構図が描かれている。[24]

第2章「農村地域の読書の地理学」では民族，階級，ジェンダーといった居住者の特徴が論じられている。ドア半島の場合，北部ではリテラシーを重視する傾向がある一方，南部は読書になじみのない住民が多く，これが図書館サービスの普及と図書館サービス存続についての住民投票に作用した。[25]

第3章「ウィスコンシン構想による読者への到達」は，ウィスコンシン州の初期の図書館活動の中心となった WFLC の指導者，ルーティ・スターンズ(Lutie Stearns) に焦点を当てている。スターンズは1896年に農村地域を対象とした巡回文庫を開始し，その数は1914年までに1,400に達し，これがウィスコンシン州の公立図書館の基盤となった。[26]

第4章「読書：誰が何を」では，ドア・カウンティとキウォーニー・カウンティの読書実態を検討している。WFLC のメンバーは男性が多く，実証実験をデモクラシーの育成と成人市民の利用を主たる目標に掲げていた。一方，図書館員は年代，性別を問わず読者を育成することを重要な役割と認識しており，両者の溝は児童へのサービスという点に表出した。[27] 1950年と1951年の統計では，図書館とブックモービルを合わせた貸出のうち，30パーセントが成人であったが，ブックモービルでは約90パーセントが児童への貸出であった。また成人の貸出のうち95パーセントが女性であり，明白な利用者の偏りがあった。[28]

第5章「子ども，教師，農村の学校」では，農村地域の学校と読書の関係性が論じられている。ウィスコンシン州では学校区の統合により統合学校 (consolidated school) 化が進められていたものの，ドア半島では1950年時点で114校のうち75校が複式学校(one-room school) であった。ほかに教区学校が4つあった。[29] アルゴマ(Algoma) にあるドア・キウォーニー・カウンティ師範学校(Door-Kewaunee County Normal School)は，農村地域のプリント・カルチャーの基盤の構築と再生産に寄与し，農業普及活動や図書館，ボランティア団体，スカウト運動と連携し，さらにそれらの団体の活動拠点としての役割も果たした。[30] 図書館を持たないキウォーニー・カウンティ農村部とドア・カウンティの南部の児童にとってブックモービルは唯一の図書館サービスであった。[31] 利用者の子どもを通じ親も図書館サービスの恩恵を受け，ブックモービルが地域全体の読書機会を拡張し，農村地帯において図書館と学校システムは相互に結びつき，相互の文化的および教育的価値を強化し合っていた。[32]

第6章「何を読むのか：子どもの選択」では，児童の図書選択が実際の貸出記録に基づいて検証されている。貸出記録によれば男女間の読書選好は明白で，男子は科学やフィクションに興味を持ち，女子は家族をテーマとする小説や職業小説を好んだ。[33] アメリカ中流階級の生活を描写するロイス・レンスキ (Lois Lenski) の『いちごつみの少女』(*Strawberry Girl*) のような図書は人気が高く，移民児童にとって，アメリカ WASP の生活様式を受け入れる単なる読み物を超えたツールでもあった。[34] 図書館の蔵書は全体としてアメリカナイゼーションプロジェクトを促進させるものであり，女子児童に対して「家庭という装置」(domestic setting) を伝達した。[35] 児童は読書によって自分をとりまく現実と異なる世界の存在を知ることができたが，保守的な町の住民はこうした図書館による影響を破壊分子的な影響力として認識することにもなった。[36]

第7章「女性，本，家庭生活」では，1950年代の農村地帯の女性の生活と読書について論じている。実証実験の対象であった北部ドア・カウンティの女性はコミュニティ活動に参加する余裕があり，女性クラブの活動を通して図書館振興に関わっていたのに対し，[37] 南部キウォーニー・カウンティは農村が多く，女性はカウンティ農業普及局(County Extension Agency) が統括する家庭クラブ(homemaker's club) への所属が数少ない社会活動であった。[38] 農村地帯の女性にとって読書は異なる生活様式への開眼

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

であり，ひそやかなレジスタンスの意味合いがあった。[39] 住民の利用状況は，図書館指導者たちが望んだ市民性を育む図書館利用という目標とは一致しなかったものの，図書館は多様な観点から住民に社会的，政治的活動としての読書機会を提供していた。[40]

第8章「勝者と敗者：住民投票とその結果」は，図書館サービスの存続を可決したドア・カウンティと否決したキウォーニー・カウンティの住民投票後の図書館サービスを扱っている。ブックモービルが児童や女性を対象にしていたこと，移民のリテラシーの状況，住民の文化的および宗教的背景，政治的情勢など複数の要因が住民投票の結果に反映した。[41] ポーリーはさらにブックモービル・システムを継続したドア・カウンティの運転手兼図書館職員を1960年代から務めたボブ(Bob H.) の図書館活動を通じて，専門職と非専門職の境界に置かれた図書館サービスの実態を解明している。司書の訓練を受けていないボブが展開した徹底的な利用者志向のサービスは，専門職によるサービスの提供方法の正統に抵触するものであったことが示されている。[42]

第9章「エピローグ」で，ポーリーは，図書館がとりわけ情報アクセスの機会から取り残された人びとにとって重要な場所であり，地域の図書館が住民にとっての知的磁場になると主張する。[43] ドア半島の読書の俯瞰図を描くのに中枢的な役割を果たしたメディアは，農業普及局，学校，公立図書館などの「組織」が提供する娯楽と自己改善のための図書，そして新聞，パンフレット，テキスト，レファレンスブックなどの情報であった。[44] これらの資料の読み書きには，教師，司書，家政学者，農業普及局員などの情報提供者，情報提供者を多様な形で援助した無給のブッククラブ参加者，スカウトのリーダー，女性クラブのメンバー，そして情報を利用する図書館利用者／住民が関わり，それぞれが多様な階級，ジェンダー，人種，民族の背景を持っていた。[45]

公立図書館での読書にかかわる利害関係者の実践と態度は，複雑な様態を示していた。図書館支援者は実証実験の目標を成人教育の普及と促進そして見識ある市民の育成に設定し，司書は児童の読書振興を第一の目的に設定した。住民は自らの価値判断にしたがって読書を行った。[46] 女性にとって読書は伝統に従うことと伝統を打ち破ることの両義性を持つ行為であり，読書をめぐる抵抗と服従に関して必ずしも相反する概念ではないことが明らかになった。[47] それゆえポーリーは特定地域・時代の読者に関する研究は，文化的権威に特権を与えるトップダウン式分析への矯正機能を持つと主張する。主体的な読者を設定することで，読者自身の資料選択や読者による図書館実践への影響をみていくことができ，実際にそうした影響力が公的な政策や目的の補強と転覆に作用している。[48] ポーリーは普通の読者の生活における読書の意味を理解するためには，社会的，物質的，文化的環境から成立する多層的な読書状況を検討する必要があり，そうした作業が人びとの読書をめぐる体験を明らかにし，読書についての厚い(thick)記述を作り出すことになると結論づけている。[49]

2.2.2 考察：農村地域の読書の俯瞰図地理学

『読書の場所』には一貫して，図書館側のサービスの理念と利用者の実際のニーズのギャップが示されている。すなわち冷戦期のウィスコンシン州のドア・カウンティおよびキウィーニー・カウンティには「図書館のエリート主義的な選書理念」対「住民のフィクションへの強いニーズ」という構図が見られ，図書館未発達地域における図書館サービス推進プロジェクトが，その内部に理念と実態との矛盾を孕んでいたことをポーリーは様々な側面から明らかにしている。

両カウンティに図書館サービスを普及させる過程で WFLC はノンフィクションの提供と成人男子利用者の増加に積極的に取り組んだ。ポーリーは貸出記録の分析によって，貸出の圧倒的多数が女性のフィクションの利用であったことを示し，委員会の戦略がその意図の通りに機能していなかったことを実証した。従来，女性のフィクションの読書は図書館界では有益な読書とはみなされなかったため，図書館研究でこの領域について踏み込んだ分析がなされることはなかった。しかしポーリーはフィクション読書を無視することなく，実際に行われていた読書が利用者にとって持つ意味を追究している。『読書の場所』は第7章で女性の読書に焦点を当ててブックモービル活動から浮かび上がる女性の読書を観察し，農家の主婦，教師，図書館員など立場の異なる女性の図書館利用について検証を行っている。

前述したように，ポーリーが農村地域の読書と図書館サービスを分析するにあたって注目したのは，プロジェクトを主導した WFLC，司書，図書館利用者にみられる「ずれ」である。まず WFLC の理念

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

と図書館で実務を担当する職員の意識にずれがあった。たとえばブックモービルを主導するWFLCは，ノンフィクションの利用促進と成年男子の図書館利用を意図したのであるが，現場の図書館員は児童サービスに注力し，WFLCの考える理念を必ずしも忠実に追究していなかった。また細かく見れば図書館サービスの前線で，専門職と非専門職における意識のずれも存在していた。1960年代のブックモービルの運転手へのインタビューは，非専門職によってなされた利用者志向の図書館実践を明らかにしているのだが，実践の最前線において運転手兼図書館職員は利用者の要求に忠実にあろうとするために，利用者の好みに合わせて図書を紹介するなど，図書館側が決めた業務規範を越えた実践を行っていた。

ポーリーが指摘するもう1つのずれは，WFLCの理念と利用者の利用実態のずれである。WFLCは「民主主義を支える図書館」という理念を掲げていたにもかかわらず，住民は個人的な楽しみの読書の場所として図書館を受け入れた。ポーリーは多数派を占める女性の読書に焦点を当てることで，図書館側がその存在を無視してきた「娯楽読書」に切り込み，読書実践が持つ多様性と複雑さを描き出している。たとえばブックモービルの中心的利用者であった農家の主婦は，ブックモービルの提供する資料によって視野を広げると同時に自らの生活基盤を確認した。読書は個人の生活および精神に複合的な影響を与えるのであり，実際の読書行為は，図書館が準備する利用目的別に分類された資料の選択肢によって規定される平板な図式には収まらない。

従来の図書館研究では，サービス提供側である図書館側から利用者へのサービスの浸透の度合いを図書館活動の成功／不成功の決定要因とみなしてきた。ポーリーが『読書の場所』で巡回文庫とブックモービルの研究を通じて示したのは，そうした一方向型の「サービス浸透モデル」によって測定できない図書館サービスの効果についてであった。利用者は図書館サービスを受動的に利用するだけでなく，図書館サービスを自己改革にとっての独立した機会ととらえ，個別の方法でその機会を活用した。そのような利用者の存在を明らかにすることで，ポーリーは図書館理念と図書館利用実態のギャップを実証的なレベルから浮かび上がらせ，読書行為の持つ複雑さと深みを提示したといえる。『読書の場所』で示された「新たな利用者像」は，近年の読書研究やプリント・カルチャーの領域で，すでに承認され研究が進展している「自らの意思によって自由に振舞う読者」とも重なるものであり，『読書の場所』は，図書館研究と読書研究を架橋する成果としてとらえることができる。

3．歴史研究の方法論

本章では，ポーリーの歴史研究の方法論を扱った主要な論文を取り上げて，研究方法論や分析視座について検討していく。ポーリーの研究方法を扱った論文は6つありこのうち，「批判的実践と関係性としての歴史研究」（M－3）と「小規模財源での成功」（M－5）は，ポーリー自身が関係する研究プロジェクトや団体について述べたものであり，研究手法というよりはプリント・カルチャー研究を支える学術コミュニティの制度に焦点をおいた論考となっている。それ以外の4つの論文について，簡単に内容を紹介する。

「意義を見出す」（M－1），「読者の抽出」（M－4），「市場モデルと抵抗を超えて」（M－6）は，読書コミュニティの分析における機関（institution）の記録すなわち人口統計データや図書館記録の重要性について述べた論文である。「『文化の使徒』を読む」（M－2）は，図書館女性史研究の記念碑的著作である『文化の使徒』の再版の序文として書かれた。アメリカ公立図書館研究の史的展開をたどるレビュー論文である。

本節では，ポーリーの歴史研究の方法論的視座が最も明確に表れている「読者の抽出」と「意義を見出す」の2論文を取り上げる。

3.1　図書館史研究の基本的視座

ポーリーの研究方法論を考察するにあたり最初に「『文化の使徒』を読む」（M－2）[50]で，その基本的な視座について確認しておきたい。この論考は，図書館史研究の記念碑的な著作であるディー・ギャリソン（Dee Garrison）『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会　1876年－1929年』の新装版が2003年に刊行されたときに序文として書かれたものであり，アメリカ公立図書館研究の史的展開をたどるレビュー論文でもある。

ポーリーは，図書館史研究に階級という概念を持ち込みそれまでの民主主義機関としての図書館の存在意義に対して疑義を呈したハリスと，『文化の使

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

徒』によって専門職の女性化を解明したギャリソンの研究を，図書館史研究の転換点として位置づけている。ただし1970年代から1980年代の修正解釈派には，普遍的なモデルを構築するために必要となる実証データの収集と分析が不足していた。[51]

一方，図書館史研究は1980年代に歴史学の新たな潮流によって影響を受けている。様々な文化制度における主流のイデオロギーへの批判とマイノリティへの着目という枠組みの中で，歴史的事象にかかわる言語と権力を記述したミッシェル・フーコー(Michael Foucault, 1926～1984）の影響はとりわけ強かった。フーコーは歴史分析に言語と権力という概念を持ち込むことによって，研究の新たな視座を示した。またマイノリティへの着目によって研究対象の見直しを迫ったことにより歴史研究全体に影響を与えたからである。[52]

また図書館史を取り巻く状況でいえば，一次史料の整備された1990年代以降の研究の展開には，先行研究と比較して明らかな研究手法の精緻化が見られた。ポーリーは代表作として1994年に刊行されたジョアン・E・パセット(Joanne E. Passet）の『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍，1900－1917年』やクリスティーヌ・ジェンキンス(Christine A. Jenkins）の1995年の博士論文『人目につかない強靭さ：児童サービス担当司書，アメリカ図書館協会，若者の知的自由：1939年－1955年』を挙げている。[53]

1990年以降，図書館史研究は，対象領域の広がりと分析の深度に進展がみられた。一次史料へのアクセスなど，物理的な研究環境が整備されることで，既存の研究で十分扱われてこなかったテーマ(ジェンダー，人種，階級，民族，性）と図書館実践の関係を分析する研究が増加した。ポーリー自身の研究も，1990年代以降の新しい図書館史研究の流れのなかに位置づけることができる。

3.2 「読者の抽出：図書館の経験」

3.2.1 読者への着目：読書の動機と解釈

2006年の「読者の抽出」(M－4）[54]は，『ライブラリー・クウォータリー』が「読者と読書」に関する特集号として刊行されたときの趣旨説明として書かれた論文であり，分析対象として取り上げてきた「読者」について，あらためて研究上の意義を検討している。

読者とテクストとのあいだのギャップを埋める初期の研究は，1984年にジャニス・ラドウェイ(Janice Radway）が発表した『ロマンスの読者』[55]である。この研究はそれまで研究者が無視してきたロマンス小説を扱っただけでなく，そうした読者の動機と解釈を解明するためにエスノグラフィックな手法を用いて真の読者を解明しようとした。

こうした手法においても無名の「一般読者」(common readers）の読書実践の解明は非常に難しいことをポーリーは指摘している。[56]その上で「一般読者」の読書実践の解明に，公立図書館の利用分析が重要な役割を果たすと主張する。これまで図書館情報学研究はもっぱら「役立つ情報」(useful information）とのかかわりで，技術および経営に関する研究を中心にしてきた。ウィーガンドが指摘するように，図書館の生活における読者(the user in the life of the library）に焦点を置き，読者の生活における図書館(the library in the life of the user）を見てこなかったのである。[57]

「一般読者」の読書実践の解明について，ジョナサン・ローズ(Jonathan Rose）は，「図書館登録者は図書の読者について確固たる量的な記録を提供できる」と指摘するが，同時に「貸出記録はほとんど何も明らかにしない」とも警告している。そして「そうした記録が意味を持つのは，図書館が奉仕するコミュニティについての厚い(thick）記述の中に置かれたときである」と強調している。[58]こうしたローズなどの指摘を再確認し，ポーリーは自身の博士号請求論文「中部辺境地域での読書：アイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー，1870年－1900年」(P－1）では，特定コミュニティの読書実践の検証とエスノグラフィックな手法を強調した。

3.2.2 考察：読書の分析からプリント・カルチャー史研究へ

「読者の抽出」(M－2）で強調されたようにポーリーの研究の特徴は，読書・コミュニティという概念を手掛かりに従来の図書館研究の領域を拡張し，そこから図書館を逆照射することによって，文化機関としての図書館の特徴を浮かび上がらせる点にある。つまり研究対象として，図書館以外の文化機関や図書館利用者以外の住民を射程に置いている。図書館研究の狭い視座を克服するために研究領域や対象を拡張するのであるが，その際，図書館学と他領

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

域を結びつける役割を果たすのが「読書行為」にほかならない。

読書は図書館における主要な活動であり，同時に図書館以外の場所でも行われる普遍的な行為でもある。読書行為をめぐる多様な人間活動をとらえることにより，文化機関としての図書館の本質に接近することが可能である。しかし図書館研究における読書行為の捉え方に関して，ポーリーは繰り返し疑義を示している。すなわち現実の図書館が「読書」を主体とする機関であるにも関わらず，図書館情報学研究が「情報学」を中核とする次元の異なる活動を扱うことによって，研究と実践の間にギャップがある。[59]

読書活動を中心とする図書館研究を進めていく際，その研究が外に向かって開かれた研究となるためにポーリーが研究上の活路を求めたのは，プリント・カルチャー研究であった。ポーリーの博士論文『中部辺境地域での読書：アイオワ州オーセージにおけるプリント・カルチャー，1870年－1900年』は，図書館情報学分野での最初の本格的なプリント・カルチャー研究であり，その後のポーリーの研究もまたプリント・カルチャー研究の枠組みのなかで展開されている。ポーリーは利用者一人一人が個別に行う読書，集団読書，読書をめぐるイデオロギー，図書館と出版文化の関係性，コミュニティにおける読書機会など，読書にかかわる様々な営為を図書館史とプリント・カルチャー研究の共通課題として設定することで，図書館領域の拡張を提唱したのである。

3.3 「市場モデルとレジスタンスを超えて：中間層としての機関」

3.3.1 読書研究のモデル化

ポーリーが最初にプリント・カルチャーおよび図書館研究の方法論について論じたのは，2002年『ブックヒストリー』に掲載された「意義を見出す」（M－1）という論文であった。[60] 2009年に発表された「市場モデルとレジスタンスを超えて」（M－6）は，[61] 2002年に示された方法論を精緻化したもので，読書研究および図書館史研究の問題意識と方法がかなり明確に提示されており，本項では2009年論文を取り上げる。

ポーリーは読書研究に大きく2つの流れがあるとする。1つはロバート・ダーントン（Robert Darnton，1939－）が示した有名な「伝達サーキット」（communication circuit）である。この図式によってダーントンは読書研究の全体像を示した。ダーントンは，「作者」（Author）←→「出版業者」（Publisher）→「印刷業者」（Printers）→「荷送り人」（Shippers）→「書籍販売業者」（Booksellers）→「読者」という流れを示した。これは人を中心とした流れであるとともに，物としての図書や雑誌の流れでもある。それを意識してか，ポーリーはこのダーントンの図式を市場モデル（market model）としている。このモデルは読書研究の諸側面を包み込んではいるが，一方通行という問題，重複の無視，さらには各要素の結びつきを説明しない傾向にあるとする。すなわち社会構造を強調する傾向があるために，個人の行動が犠牲にされている。[62]

ポーリーはダーントンのモデルに対抗するものとして抵抗者としての読者（Reader Resistance）という観点から，ミシェル・ド・セルトー（Michel de Certeau，1925－1986）の密猟（poaching）の考えを重視する。民衆の日常的な生活に根差す文化的抵抗の多様な形に着目したアナール学派のド・セルトーは，読書行為を密猟にたとえ，テクストが受け手によって領有（appropriation）されるという契機を指摘した。ここでは日常生活における個人の読書実践の解明が重要になる。[63]

ポーリーはダーントンとセルトーの分析手法は，理論的，方法論的な問題を内包していると指摘している。社会レベルのマクロな図式の記述や説明を，個人の日常生活にかかわるミクロな記述や説明にいかに接合すべきなのか。個人と社会はどのようにして，相互に対立したり影響を与えたりするのか。両者のモデルを用いてこうした問題を説明することはできない。ポーリーによると，このマクロとミクロとのジレンマが，現在のプリント・カルチャー研究に顕在化しているのは明白である。社会の影響は，階級，ジェンダー，人種，宗教，エスニシティ，性的志向といったマクロな関係性の側面から解明されている。一方，図書研究の精緻で実証的な研究は，特定の時間と空間での作者，読者，テクストなどの個々の演じ手をミクロなレベルで分析する。ポーリーはこの両者のジレンマを埋める手立てを提示していく。[64]

ここでポーリーは個人と社会の橋渡しのために，中間レベルの概念を重視し，プリント・カルチャー研究での重要な概念として社会的機関（social insti-

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

tution）を指摘する。19世紀後半から20世紀の場合，構造と個人との中間的な層（layer）を解明するために，社会機関の分析を用いることができる。[65]

ポーリーが分析対象を19世紀後半に設定する理由は，この時代に読書が文化として広範に行き渡り，読書資料の生産や配布のネットワークが構築され，読書に関わる公私の機関が発展し，そうした公私の機関（図書館，学校，農業普及機関，女性クラブ，教会など）さらには自発的な機関に関係する人（編集者，牧師，教師，司書，ホーム・エコノミスト，農業普及担当者，ブッククラブの参加者，女性クラブの参加者，図書館利用者など）が増大したからであり，また官僚制が進んだからである。[66] 官僚制の下で各機関は記録の作成と管理を行うのであるが，その過程で生成される文書群の分析をポーリーは強調した。[67]

ダーントンの図式とセルトーの密猟の概念は対照的にみえる。しかし密猟の概念は密猟という言葉が象徴するように，正統な行為が存在しそれにたいする違法な行為を意味する。したがって文芸エリートと一般読者という二分法が措定されている。ポーリーはこの点が文化を理解するについて過度の簡略な理解につながるとし，[68] 19世紀後半以降のプリント・カルチャー研究にとっては，中間に位置する機関の研究が最も実り多いと結論する。[69]

3.3.2 考察：プリント・カルチャー研究における分析対象としての「機関」

論文「市場モデルと抵抗を超えて」（M－6）の中で，ポーリーはプリント・カルチャー／図書館史の方法論モデルを読書史に求め，その有効性について検討している。ポーリーが最初に比較モデルとして提出したのが，書籍を中心とするメディアのサイクルを「市場モデル」として掲げるダーントンと，読みにおける読者の抵抗を焦点化しているセルトーである。ポーリーはダーントン流のマクロモデルとセルトー流の文化的抵抗モデルを踏まえつつ，二つのモデルの持つ欠点を克服すべく，オルタナティヴな方法論を模索している。

そこで導入されるのが，社会構造と個人の「中間層」として存在する機関レベルの分析である。図書館，学校，農業普及機関，女性クラブ，教会などが代表的な中間的社会機関であり，編集者，牧師，教師，司書，ホーム・エコノミスト，農業普及担当者，ブッククラブの参加者，女性クラブの参加者，図書館利用者といった多様な人々が機関の活動運営にかかわる。この層を分析対象とすることにより，既存の読書共同体モデルの抽象度を下げて，文化機関が営む社会的活動を実証的に検証することが，ポーリーの分析戦略であったと考えられる。

ポーリーが中間層の社会機関の分析においてとりわけ着目するのは，19世紀後半の官僚制の確立の副産物として大量に生産されるようになった文書群である。既存の読書研究は公刊資料を対象とし，未刊行資料は研究の対象から外されてきた。しかし未公刊資料や手書き資料は社会と個人を結ぶ情報メディアとして豊かな内容を含んでいる。たとえば図書館という中間的社会機関で生産されるのは，図書館専門職による業務記録，利用者によるグループ活動記録などの文書群であり，これらが図書館史研究のための豊かな鉱脈となる。[70] 2010年に刊行されたポーリーの『読書の場所』は，まさしく上記で述べた機関の分析を軸としてウィスコンシン州の公立図書館と読書コミュニティを解明した研究である。

4．図書館情報学の批判的研究

ポーリーの第3番目の研究領域は，図書館にかかわる批判的視点を，研究領域である図書館情報学と実践領域である図書館学教育に照射することによって浮かび上がる課題や論点を検討するもので，ポーリーは自らの研究領域としてこの部分を「図書館情報学の批判的視座」（Critical Perspectives on Library and Information Studies）と呼んでいる。[71]

図書館情報学と図書館情報学教育カリキュラムにおける「人種」と「階級」の捉え方を検討した論文「ヘゲモニーの侍女」（C－1），「不平等な遺産」（C－5），図書館情報学にとって中核となる概念である「情報リテラシー」を取り上げ図書館情報学コミュニティにおけるこの用語の受容と解釈を批判的に評価した論文「情報リテラシー」（C－2）が，この領域の代表的な研究である。

これらの他にも「ゴーマンの防御」（C－3）と「図書館情報学カリキュラムにおける図書館史」（C－4）のように，図書館情報学教育への批判的立場をより明確に打ち出した論文がある。

ポーリーは批判的研究を展開するにあたり，権力と抑圧の関係性によって捉えるべきアイデンティティとして階級，ジェンダー，人種，民族，性など

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

の概念を分析視角として設定している。本節ではこれらのアイデンティティの中から，「階級」，「人種」が扱われている論文をまず初めに取り上げ，ポーリーの図書館情報学への批判的視座を明らかにしていく。次に図書館情報学の本質に関わる概念である「リテラシー」を扱った論文を見ていくことにしたい。

4.1 「ヘゲモニーの侍女：「階級という視座」からみた図書館情報学カリキュラム」および「不平等な遺産：人種と多文化主義」

4.1.1 図書館情報学における階級と人種

「ヘゲモニーの侍女」（C－1）が書かれたのは1998年であり，[72] 博士論文提出から2年後のことである。博士論文ですでに批判的研究の視座となる階級，ジェンダー，年齢，民族的マイノリティなどの分析枠組みが用いられていたことを考慮すると，1998年の論文はポーリーが自らの研究枠組みとしてすでに使ってきた概念を，掘り下げて検証するために書かれたものと位置づけられよう。

ポーリーは論文の冒頭，教育学，史学，社会科学といった領域では，階級分析が主要な理論的分析視座であるにもかかわらず，図書館情報学では階級という視座が無視されてきたと述べる。さらにリベラルな立場からすべての住民を対象としてきたとされる図書館サービスに関して，排除されている人々に対する支援については疑問が残るとして，その活動に疑義を呈している。[73]

ポーリーは，図書館情報学において最初に多元主義の視座を参照しながら階級を論じた人物としてハリスを評価しているが，ハリスは管理統制主義的な視座については指摘しなかった。[74] 多元主義のキーワードは個人，行動，利害衝突，参加，コンセンサスなどで表現される。図書館ではこの考え方を公共選択理論として採用し，効率的な資源の配分を保障する民間の方法を導入している。一方，管理統制主義のキーワードは官僚主義，合理性であり，個人の行動は組織内の地位と問題解決手腕から承認される。多元主義と管理統制主義による図書館経営は，科学的な入出力モデルとして想定されている。[75] 両者は図書館情報学のカリキュラムとして，経営管理，情報システム，データベース・デザイン，研究方法，情報蓄積・検索など広い範囲をカバーするとはいえ，図書館情報学の全体像をとらえているとは言えない。[76]

図書館情報学は伝統的に多元主義と管理統制主義の視野からサービスの供給，技術的効率性，管理上の効率性を追究し，政治的な関心が薄い専門職であった。この傾向は1923年に出されたウィリアムソン・レポートにすでにあらわれ，以後，この分野では4つの領域「法人組織との関係性」，「専門職化」，「科学的地位獲得への願望」，「リテラシーと制度の階層化」に焦点が当てられてきたのであるが，[77] 階級の視座からみると図書館情報学における専門職化，科学的地位，大学への付属への固執が，図書館情報学の領域としてのジレンマを引き起こしている。[78]

階層化のもう一つのポイントは図書館情報学の教育制度にある。ウィリアムソン・レポート以後の図書館情報学教育は大学院レベルで実施され，そのプログラムは標準化されたカリキュラムと特定の教科書に沿っている。ポーリーは，大学は資本主義の要求に応じて変化するものであり，図書館情報学が独立性を捨て，大学の領域内に囲い込まれている限りにおいて，そのカリキュラムは主流の階級に影響されると指摘する。[79]

ポーリーは階級の視座を採用することが自らの領域の再検討につながると述べ，図書館情報学は情報の生産，提供をめぐる政治的問題（検閲，情報ネットワークの制度化，コミュニティ情報とのかかわり）が問われているとする。たとえば階層化によるリテラシー低下は情報提供における中核的な問題であり，ここに階級と情報とのかかわりが映し出されている。[80] 図書館は文化的資本の分配や情報アクセスに関して，重要な役割を担ってきた。その過程でみられる，実践にかかわる権力作動のプロセスの解明とオルタナティヴな実践についての分析が，課題として残されているのである。[81]

次に，階級と同様，批判的研究の重要な視座である「人種」（race）を「多文化」概念を参照しながら検討した2006年の論文「不平等な遺産」（C－5）の検討に移りたい。[82] この論文でポーリーは図書館情報学が伝統的に人種という直接的な用語を使用せず，人種問題やマイノリティの差別にかかわる問題を，多文化というあいまいな用語に置き換えて取り扱ってきたことが，カリキュラムにおけるマイノリティにかかわる問題の隠蔽につながっていると批判している。

「多文化」という用語は，人種，ジェンダー，民

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

族性，性などのアイデンティティに関する関心を表現するために用いられるようになったが，定義しにくい概念である。中でも争点を含む人種に関して，図書館員と研究者はこの用語を避ける傾向にあり，図書館情報学で「人種」を冠した科目はほとんどない。ポーリーは，人種と多文化は同等とはいえず，多文化という概念は問題ですらあると指摘する。アメリカ図書館協会教育委員会(Committee on Education, American Library Association) のローナ・ピーターソン(Lorna Peterson) の言説を援用すれば，多文化と多様性が平等の問題を矮小化するのである。[83]

多文化は，女性，ゲイ，障害者，アジア系アメリカ人，スペイン系アメリカ人，先住アメリカ人，アフリカ系アメリカ人を対象としているが，個人や人種の相違よりも構造的・制度的な面に焦点を当てている。ポーリーは図書館界が人種の代わりに多文化や多様性(diversity) という言葉を使用することによって，人種差別の議論を忌避していると指摘する。人種は多文化の中核にある争点であり，この概念を厳密に理解しなければ図書館情報学教育・研究は不十分であるし，アメリカ社会の性質を矮小化し続けることにもなる。[84]

人種差別を論じるにあたって，ポーリーは4つの図書館情報学モデル(科学・技術モデル，ビジネス・管理モデル，使命・サービスモデル，社会・文化モデル) を設定した。そしてこれらのモデルが人種差別とどのように結びつき，どのように図書館情報学教育コミュニティに影響を与えてきたのかを示している。[85]

「科学・技術モデル」は，情報システム，データベース・デザイン，研究方法，情報蓄積・検索を扱い，大きく分けて2つのグループを含んでいる。情報の組織化と情報システムおよび検索である。「ビジネス・管理モデル」は，情報と情報利用者を消費財および消費者ととらえるもので，管理，マーケティング，戦略計画，プログラム評価を扱い，情報の生産と組織化のアプローチを志向している。「使命・サービスモデル」は利用者のニーズに合わせた支援を重視するモデルで，啓蒙，民主主義などにかかわる図書館の使命・信念に基づく。「社会・文化モデル」は，書誌学，書物史，図書館史，資料管理，文献学，読書とリテラシーなどを扱う。[86]

「使命・サービスモデル」，「社会・文化モデル」は図書館情報学の中に人種差別的な考え方を編入しているのだが，白人の図書館員や研究者はそれに気づいていない。というのもその考え方はマイノリティを支援する社会と文化的使命として，初期の図書館職に埋め込まれたからである。マイノリティ支援は図書館サービスにおける文化的社会的優位性を主張し，図書館員は「文化的使節」として描かれるようになった。さらに「社会的・文化的モデル」は，白人が執筆した英語文献の蔵書を通じて差別主義を埋め込んだ。[87]

見掛け上の価値自由を示す「科学・技術モデル」は，基本的な多様性を育む環境設定に失敗し，男性白人優位社会がマイノリティを周縁化している。個人の要求を強調する「ビジネス・管理モデル」もマイノリティを阻害しているが，一方でこのモデルは，図書館界における人種の多様化の推進やマイノリティへの図書館サービスを通じ，差別是正の推進力となる可能性を持っている。[88]

ポーリーは図書館情報学コミュニティにおける白人性(whiteness) を回避するために，図書館を「非白人的空間」あるいは「人種中立的な空間」へと方向転換させることを提唱する。[89] 人種差別と闘うには，「多文化」という言葉はあまりにも一般的すぎるのであり，人種，ジェンダー，階級，民族，セクシュアリティの概念をもっと特定化して，その要素を理論化する必要があると結論する。[90]

4.1.2 考察：批判的視点の方法論的枠組みとしての階級と人種

1998年に発表した「ヘゲモニーの侍女」(C－1) は，図書館情報学が階級の概念を多元主義と管理統制主義によって隠ぺいすることで，情報の生産と流通プロセスが内包する文化政治的な問題を捨象してきた経緯を解明するものであった。[91]

ポーリーは，この論文で図書館情報学における文化政治的な視点への欠落に警鐘を鳴らし，階級の視座を投入することによって，図書館という文化機関の持つ本質的な要素の再考を促している。また図書館が主流階級の文化にかかわる実践を中心とすることで捨象してきた，コミュニティにおける情報流通やマイノリティ利用者への視点を図書館情報学の中核として提示する。図書館は文化的資本の分配と情報アクセスについて，主要な位置づけを占めてきた。そうした実践に作動する権力を解明することが，図

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

書館情報学の中心的な課題であるというのがポーリーの主張であった。

一方，「不平等な遺産」（C－5）は，「ヘゲモニーの侍女」から10年後に書かれたものである。この論文の中でポーリーは4つの図書館情報学モデル（科学・技術モデル，ビジネス・管理モデル，使命・サービスモデル，社会・文化モデル）を設定し，各モデルと人種差別の関係性を示して図書館情報学コミュニティへの影響を述べている。

ポーリーは図書館情報学における白人性を解体するために，図書館を非白人的空間あるいは人種中立的空間にしていくことを提唱している。また図書館情報学において多文化というあいまいな用語を回避して，人種，ジェンダー，階級，民族，性などのアイデンティティを特定化し議論する必要性が述べられる。図書館情報学は人種問題に対峙し，人種差別の遺産を再構築すべきであるというのがポーリーの主張である。

図書館情報学のなかで，実証主義的方法論の囲い込みにより隠ぺいされてきた階級および人種の2つの概念を取り上げることによって，ポーリーは図書館研究における批判的視座を明確に打ち出したといえる。

4.2 「情報リテラシー：矛盾した結合」

4.2.1 図書館情報学におけるリテラシー

2003年に発表された論文「情報リテラシー」（C－2）は，批判的研究の分析視点というよりは，むしろ図書館情報学の基盤というべき「情報リテラシー」を取り上げ，図書館情報学におけるこの概念の受容を追いながら，図書館情報学コミュニティ自体を批判的に検証している。[92]

議論を進めるにあたってポーリーは，情報リテラシーを市民のエンパワメントとデモクラシーに資するものととらえるモデル，そして情報の質をコントロールするものとしてとらえるモデルの2つを設定した。[93]情報リテラシーの概念には，これらの相対する目的にかかわる緊張が埋め込まれている。つまり図書館は民主主義の砦として，そしてエリート主義の統制機関として語られてきた。[94]

ジェフリー・ナンバーグ（Geoffrey Nunberg）は分類，目録，索引，レファレンス・ツールなどを「情報ジャンル」と呼ぶ。新聞，レファレンスブック，図書館目録，教科書などはいずれも，その情報が生産された時の文脈から切り離され脱文脈化され再結合された情報である。[95]ただし情報はそれ自体で存在することはなく，常に社会的関係性の中で生産され利用されるのであり，脱文脈化は錯覚にすぎない。情報の表現と関係性は社会を構築する基層を反映している。マイケル・アップル（Michael Apple）によれば，すべての情報の利用は再文脈化のプロセスである。こうした考え方は主体的な読者を知識の構築者として把握することを可能にし，図書館員を魅了してきた。[96]

しかしこうした個人による再文脈化のプロセスに，テクストの生産分配の制度的な構造が作用することによって，主体的な利用者が損なわれることを認識する必要がある。[97]テクストの生産と再文脈化は少数者に特権化されている。再文脈化の際，生産者のオリジナルな言説は体系的な権力の作動によって再配置されるからである。[98]

民主的な情報リテラシーの実践のためには，批判的な視座が求められている。一方，情報リテラシーを制御しようとする圧力が強く作用し，批判的な言説に向けた探求は伝統的技術管理的モデルによって阻まれている。[99]また技術的な転換の速度に対する末端の利用者の遅れや知識マネージメントの必要性に関する現在の説明は，情報リテラシーの確立と制度化にかかわる権力の問題を遮断しており，政治的な価値と離反している。情報リテラシー概念の本質的な議論のために，図書館情報学だけでなく教育学，認識論，倫理学，政治学，社会理論の分野で情報リテラシーの本質と影響を問うことが必要である。[100]

誰がどのような資料を誰のために使っているのか。どのような団体と個人が経済的政治的出版援助を得ているか。誰が情報の脱文脈化，再配置化，再文脈化に参加しているのか。図書館員と研究者はこうした問題を情報リテラシーの教育の枠組みの中に位置づけるべきであるというのがポーリーの主張である。[101]

ポーリーは情報リテラシーのカリキュラムにおいてツールやスキルに加え，情報の作動を理解するために文脈と内容の学習の重視を強調すべきであると結論づけている。情報とリテラシーのヒエラルキーを補強するのではなく，規範的政治的なかかわりを明示しながら，情報アクセスを消費者と生産者に分ける二分法を問題化し，個人とグループを知識の生産者として認識する必要がある。特に情報リテラ

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

シーという領域では，自由と統制が永続的に拮抗する事実を受け入れなければならないのである。[102)]

4.2.2 考察：図書館情報学の基盤的概念の批判的検討と情報受容者への着目

4.1節で取り上げた2つの論文「ヘゲモニーの侍女」(C－1）と「不平等な遺産」(C－5）は，批判的研究における分析軸となる概念を再検討するものであった。一方「情報リテラシー」論文(C－2）は，図書館情報学の依拠する基盤そのものに対して批判的視座を設定しているところに特徴がある。

情報，リテラシーという用語はともに図書館情報学の存在意義とかかわる概念であり，この領域では両者を図書館の特定のイデオロギーと結びつけることで肯定的にとらえ，専門職の使命として位置づけてきた。ポーリーはそれぞれの語の歴史的展開を詳細に検討することで，図書館情報学コミュニティにおいて認識されてこなかった両概念の持つ文化政治的統制力の存在を指摘し，既存の解釈に疑問を投じている。

ポーリーはこの論文で，図書館専門職の実践対象としてオリジナルな文脈から切り離された「物としての情報」の存在を浮かび上がらせた。情報の生産と消費が分断されることによるテクスト内容の脱文脈化を批判し，また同時に社会政策として実施されてきたリテラシーの社会統制的な側面を示唆した。図書館における情報リテラシーの概念は，民主主義の促進とエリートによる社会統制という相互に矛盾する目的を内包し，解消されない矛盾を抱えたまま今日に至っているのである。

このようなジレンマの中でポーリーは図書館情報学における情報リテラシーを脱文脈化と統制という観点から批判し，オルタナティヴな視座を示唆する。1つは情報利用における情報ニーズのシステム志向理論から，情報探索行動の認知論的アプローチへの移行による利用者中心モデルの構築である。もう1つはプリント・カルチャー研究における，非エリートを対象とする読者研究である。

ここで提示された利用者に着目するオルタナティヴは，ポーリーの批判的研究における特徴的な視点を象徴している。それは文化政治的差異にかかわる意識が希薄な図書館情報学の既存の認識論を克服するための方法として，情報の受け手に着目する点である。送り手から提供された情報を受動的に受け入れるだけでなく，その情報に抵抗し批判的な解釈を付加する主体的な受け手の存在をポーリーは重視するのである。そうした視座は博士論文とそれに続くプリント・カルチャー史の研究に直接反映されている。

5．おわりに

本稿ではポーリーの研究の全体像を描き出すために，その研究成果をプリント・カルチャー／公立図書館史の研究，研究方法論，図書館学の批判的研究の3つの領域に分けて，論じてきた。ただしこの3つの領域は独立したものではなく，相互に連関し合っていることはいうまでもない。なかでも「図書館情報学および図書館」への批判的な見方は，博士論文提出の2年後に，階級を扱った論文「ヘゲモニーの侍女」(C－1）を発表していることからも，ポーリーの研究を貫く最も基本的視座であることはまちがいないだろう。

批判的図書館研究に関して，ポーリーは2つの方向からこの問題にアプローチしている。すなわち方法論や研究の視点について取り上げたメタレベルの研究と実践に照準をあわせた実証的な歴史研究である。方法論を扱った論文の中で，図書館情報学コミュニティが技術・管理的な問題にこの領域の焦点を集中させることで，図書館情報学が問うべき文化政治的な問題を隠蔽してきたことを，ポーリーは繰り返し批判している。そして実際にそうした問題を覆う言説や理念を一つずつひきはがしながら，図書館情報学で本質的に問題とすべき論点を浮かび上がらせている。一方，歴史研究では，方法論で取り上げた論点が，実践の中でどのように作動しているかを実証的に分析するために，特定のコミュニティの図書館や読書をめぐる状況を総合的に検討している。

メタレベルの研究と実践に即した実証研究を通して，ポーリーは図書館実践と図書館情報学が，拮抗する理念を内部に抱えていることを示唆した。情報の制御と制御への抵抗にかかわる図書館の姿勢やサービスの配分をめぐる主流と周縁の葛藤は，その典型例といえるだろう。ポーリーはこの矛盾を領域固有の性質として受け入れ，真正面から向き合うことの重要性を主張し，実際自らの歴史研究のなかで図書館や読書をめぐる葛藤，軋轢，抵抗といった現象を描き出してきた。

図書館の制度と発展に付随する権力関係の再生産

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

という視点から図書館を研究することの重要性は，1970年代にすでにハリスによって示されていた。しかしハリスは図書館史の一般図式の提示にとどまり，モデルの解釈にかかわる実証的な分析は必ずしも十分になされなかった。ポーリーの研究は基本的にはハリスら修正解釈派の立場を立脚点とするものの，修正解釈派研究の問題点として指摘されてきた実証性や論拠となる史料に関わる課題を克服している。

具体的にいえば，それはポーリーが展開してきた図書館とプリント・カルチャーの歴史研究を通じて行われたものであり，指導教員であったウィーガンドの影響が大きい。すでに述べたように，ウィーガンドは，1990年代半ばから図書館情報学の問題点を克服しつつ図書館研究を進めていくために，読書や多様な読書装置を対象とする批判的研究であるリーディング・スタディーズの導入を提唱していた。[103] ウィーガンドは図書館以外のプリント・カルチャーの領域に図書館情報学の対象を広げること，そして研究対象となる事象を階級，ジェンダー，人種，民族的マイノリティといった今までの図書館研究に欠落していた特定の切り口から再検証し，再構築していくことを要求していた。ポーリーはウィーガンドからの研究上の期待に応え，ライブラリアンシップを取り巻く文化政治構造の見直しを行う動的な歴史研究を展開したのである。

批判的研究は文化そのものへの洞察を要求し，また文化を生み出し再生産する社会的構造への考察を重視する。そして文化政治的課題と向き合い，それまでに構築してきた図書館学にかかわる理念や信念を問い直すものである。このような作業が図書館情報学研究にとって重要であることはいうまでもないが，すべての価値を権力闘争の要因とみなすことで，一定のコンセンサスを遠ざけたり，あるいは抽象的な議論にとどまる危険性をも持っている。

ポーリーの研究がこうした陥穽を回避できた理由は，メタレベルでの議論と実証的な歴史研究が並行して進められてきたからだと考えられる。ポーリーは図書館情報学における文化政治学的な視座の重要性を提示しながら，同時に実践のレベルでの文化政治的差異の実証的な分析を継続して行ってきた。このことにより，ポーリーの批判的図書館研究は，図書館情報学領域における批判的研究を一段階上のレベルに押し上げたと言えるのである。

本稿をまとめるにあたって，ハワイ大学コンピュータ情報科学部の安里のり子先生，実践女子大学文学部の小林卓先生，明治大学文学部の三浦太郎先生から相関図書館学方法論研究会の折に貴重なアドバイスをいただいたことを感謝します。

本研究は2009年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「批判的図書館史研究の構築」の助成を受けている。

注

1）プリント・カルチャー研究は，メディア史における伝統的なメディアである図書およびその関連領域にかかわる歴史的・文化的研究として位置づけられる。具体的には，資料の生産，頒布，利用，蓄積，廃棄までの一連のプロセスを分析対象とし，著述・編集・生産・出版・販売・著作権・図書館・検閲，文学批評，リテラシー・読書などに関わる，社会的・経済的・文化的歴史に焦点が当てられている。Jonathan Rose, "History of the Book," *Encyclopedia of Library and Information Sciences*, 3rd ed. Vol.3, eds. Marcia J. Bates and Mary Niles Maack, Boca Raton, Florida, CRC Press, 2010, p.2142.

2）ハリスの図書館史研究の視点については，以下の文献を参照のこと。

①Michael H. Harris, "The Purpose of the American Public Library: A Revisionist Interpretation of History," *Library Journal*. 1973, vol.98, no.16, p.2509-2514.

②Harris, Michael H. 図書館の社会理論．根本彰編訳．青弓社，1991，212p.

3）ウィーガンド図書館史研究の視点については，以下の文献を参照のこと。

①Wayne A. Wiegand, "Tunnel Vision and Blind Spots: What the Past Tells Us about the Present; Reflections on the Twentieth-Century History of American Librarianship," *Library Quarterly*. 69(1), 1999, p.1-32. [ウィーガンド「20世紀の図書館・図書館学を振り返る：狭い視野と盲点」(川崎良孝訳) 川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ』京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2001，p.3-44]

②Wayne A. Wiegand, "Introduction: Theoretical Foundations for Analyzing Print Culture as Agency and Practice in a Diverse Modern America," *Print Culture in a Diverse America*. eds. James P. Danky and Wayne A. Wiegand, Urbana, Illinois, University of Illinois Press,

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

1998, p.1-13.

③Wayne A. Wiegand, "Out of Sight, Out of Mind: Why Don't We Have Any Schools of Library and Reading Studies?," *Journal of Education for Library and Information Science*. 38(4), 1997, p.314-326.

④川崎良孝「ウェイン・A. ウィーガンドと図書館史研究：第4世代の牽引者」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』no. 10, 2011, p. 5–36.

4）書誌事項は以下の通りである。

①Christine Pawley, "Reading on the Middle Border: The Culture of Print in Osage, Iowa, 1870-1900," Ph.D. dissertation, University of Wisconsin, 1996.

②Christine Pawley, "Hegemony's Handmaid? The Library and Information Studies Curriculum from a 'Class Perspective'," *Library Quarterly*. 68(2), 1998, p.123-144.

③Christine Pawley, "What to Read and How to Read: The Social Infrastructure of Young People's Reading, Osage, Iowa, 1870 to 1900," *Library Quarterly*. 68(3), 1998, p.276-297.

④Christine Pawley, "Better than Billiards: Reading and the Public Library in Osage, Iowa, 1890-1895," eds. James P. Danky and Wayne A. Wiegand, *Print Culture in a Diverse America*. Urbana, Illinois, University of Illinois Press, 1998, p.173-199. [ポーリー「ビリヤードより良いもの：1890年から1895年のアイオワ州オーセージにおける読書と公共図書館」（吉田右子訳）川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ』京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2001，p. 119–152]

⑤Christine Pawley, "Advocate for Access: Lutie Stearns and the Traveling Libraries of the Wisconsin Free Library Commission, 1895-1914," *Libraries and Culture*. 35(3), 2000, p.434-458.

⑥Christine Pawley, *Reading on the Middle Border: The Culture of Print in Late-Nineteenth-Century Osage, Iowa*. Amherst, Massachusetts, University of Massachusetts Press, 2001, xi, 265p.

⑦Christine Pawley, "Reading versus the Red Bull: Cultural Constructions of Democracy and the Public Library in Cold War Wisconsin," *American Studies*. 42 (3), 2001, p.87-103.

⑧Christine Pawley, "Seeking "Significance": Actual Readers, Specific Reading Communities," *Book History*. 5, 2002, p.143-160.

⑨Christine Pawley, "Reading Apostles of Culture: The Politics and Historiography of 'Library History'," *Apostles of Culture: The Public Librarian and American Society, 1876-1920*. Dee Garrison, Madison, Wisconsin, The University of Wisconsin Press, 2003, p.xvii-xxxiv.

⑩Christine Pawley, "Historical Research as Critical Practice and Relationship: The Carnegie Libraries in Iowa Project," *Journal of Education for Library and Information Science*. 44(3/4), 2003, p.235-245.

⑪Christine Pawley, "Information Literacy: A Contradictory Coupling," *Library Quarterly*. 73(4), 2003, p.422-452.

⑫Christine Pawley, "Gorman's Gauntlet: Gender and Crying Wolf," *Journal of Education for Library and Information Science*. 46(4), 2005, p.304-311.

⑬Christine Pawley, "History in the Library and Information Science Curriculum: Outline of a Debate," *Libraries & Culture*. 40(3), 2005, p.223-238.

⑭Christine Pawley, "Retrieving Readers: Library Experiences," *Library Quarterly*. 76(4), 2006, p.379-387.

⑮Christine Pawley, "The Race, Reading, and the Book Lovers Club of Des Moines, Iowa, 1925-1941," *The Annals of Iowa*. 65, 2006, p.35-59.

⑯Christine Pawley, "Unequal Legacies: Race and Multiculturalism in the LIS Curriculum," *Library Quarterly*. 76(2), 2006, p.149-168.

⑰Christine Pawley, "A 'Bouncing Babe,' a 'Little Bastard': Women, Print and the Door-Kewaunee Regional Library, 1950-1952," *Women in Print: Essays on the Print Culture of American Women from the Nineteenth and Twentieth Centuries*. eds. James P. Danky and Wayne A. Wiegand, Madison, Wisconsin, University of Wisconsin Press, 2006, p.208-225.

⑱Christine Pawley, "Blood and Thunder on the Bookmobile: American Public Libraries and the Construction of 'the Reader'," *Institutions of Reading: The Social Life of Libraries in the United States*. eds. Thomas Augst and Kenneth Carpenter, Amherst, Massachusetts, University of Massachusetts Press, 2007, p.264-282.

⑲Christine Pawley, "Success on a Shoestring: A Center for a Diverse Print Culture History in Modern America," *Library Trends*. 56(3), 2008, p.705-719.

⑳Christine Pawley, "Beyond Market Models and Resistance: Organizations as a Middle Layer in the History of Reading," *Library Quarterly*. 79(1), 2009, p.73-93.

㉑Christine Pawley, *Reading Places: Literacy, Democracy, and the Public Library in Cold War America*. Amherst, Massachusetts, University of Massachusetts Press, 2010, xi, 325.

5）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ①

6）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑥

7）Chirstine Pawley, *op. cit.* 4) ①, p.17-55.

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

8）*ibid.*, p.56-117.
9）*ibid.*, p.118-217.
10）*ibid.*, p.218-271.
11）*ibid.*, p.272-311.
12）*ibid.*, p.1. シャルチェの引用は次の通り。ロジェ・シャルチェ（長谷川輝夫訳）『書物の秩序』，ちくま学芸文庫，1996, p.22-23.
13）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ①, p.3-4.；シャルティエ『書物の秩序』*op. cit.* 12) p.48.
14）イーザーの読者反応理論については，以下の文献を参照のこと。ヴォルフガング・イーザー（轡田収訳）『行為としての読書：美的作用の理論』岩波書店，2005, xx, 415p.
15）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ①, p.5-6.; Stanley Fish, *Is There a Text in This Class*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1980, p.14.
16）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ①, p.8-9.
17）*ibid.*, p.9.
18）*ibid.*, p.10-11.
19）*ibid.*, p.12.
20）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ㉑
21）*ibid.*, p.19-27.
22）*ibid.*, p.28.
23）*ibid.*, p.6-8.
24）*ibid.*, p.1-32.
25）*ibid.*, p.33-66.
26）*ibid.*, p.67-111.
27）*ibid.*, p.113-121.
28）*ibid.*, p.120-121.
29）*ibid.*, p.154-158.
30）*ibid.*, p.163, p.167, p.175.
31）*ibid.*, p.170-172.
32）*ibid.*, p.176.
33）*ibid.*, p.191-193.
34）*ibid.*, p.187.
35）*ibid.*, p.201-203.
36）*ibid.*, p.203.
37）*ibid.*, p.206-207.
38）*ibid.*, p.209.
39）*ibid.*, p.231.
40）*ibid.*, p.233.
41）*ibid.*, p.240-243.
42）*ibid.*, p.247-251.
43）*ibid.*, p.266-267.
44）*ibid.*, p.268.
45）*ibid.*, p.268-270.
46）*ibid.*, p.272-273.
47）*ibid.*, p.276.
48）*ibid.*, p.277-278.
49）*ibid.*, p.278-279.
50）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑨, xvii-xxxiv.
51）*ibid.*, p.xx-xxii.
52）*ibid.*, p.xxiv.
53）*ibid.*, p.xxv. ジョアン・E・パセット（宮崎真紀子，田口瑛子訳）『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍，1900－1917年』京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2004, xiii, 233p.；Christine Jenkins, "The Strength of the Inconspicuous: Youth Services Librarians, The American Library Association, and Intellectual Freedom for The Young, 1939-1955," Ph.D. dissertation, University of Wisconsin, 1995.
54）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑭, p.379-387.
55）Janice Radway, *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*. new ed., Chapel Hill, North Carolina, University of North Carolina Press, 1991, x, 274p.
56）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑭, p.380-381.
57）*ibid.*, p.381. ウィーガンドの原文は次の通り。Wayne A. Wiegand, "To Reposition a Research Agenda: What American Studies Can Teach the LIS Community about the Library in the Life of the User," *Library Quarterly*. 73(4), 2003, p.379-380.
58）*ibid.*, p.381-382. ローズの原文は以下の通り。Jonathan Rose, "History of Reading," *Historically Speaking*. 5(3), 2004, p.36.
59）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑫, p.307-308.
60）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑧, p.143-160.
61）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑳, p.73-93.
62）*ibid.*, p.74-78.
63）*ibid.*, p.78-80.
64）*ibid.*, p.80.
65）*ibid.*, p.81.
66）*ibid.*, p.82.
67）*ibid.*, p.83-84.
68）ポーリーは読書研究者が密猟の定義を安易にあてはめようとする傾向に異議を唱えている。Christine Pawley, *op. cit.* 4) ㉑, p.277-278.
69）*ibid.*, p.88-90.
70）ポーリーが最も豊かな図書館記録として重視するのは貸出記録であり，自らも博士論文で貸出記録を用いて，特定のコミュニティにおける読書の状況を浮かび上がらせている。しかしながらポーリーは貸出記録が，歴史的には図書館において軽視されてきたこと，現在ではプライヴァシーの問題で利用困難であるという問題点を指摘している。Christine Pawley, *op. cit.* 4) ㉑, p.18-19.
71）Christine Pawley, *Pawley Web Page*.〈http://slisweb.lis.wisc.edu/~cpawley/〉.［引用日：2011-01-19］
72）Christine Pawley, *op. cit.* 4) ②, p.123-144.
73）*ibid.*, p.124.

NII-Electronic Library Service

Nippon Association for Libraries

74) *ibid.*, p.125.
75) *ibid.*, p.129-130.
76) *ibid.*, p.131.
77) *ibid.*, p.132.
78) *ibid.*, p.132-138.
79) *ibid.*, p.138.
80) *ibid.*, p.139-140.
81) *ibid.*, p.141.
82) Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑯, p.149-168.
83) *ibid.*, p.149-152.
84) *ibid.*, p.152-153.
85) *ibid.*, p.153.
86) *ibid.*, p.154-155.
87) *ibid.*, p.158-159.
88) *ibid.*, p.161-162.
89) *ibid.*, p.162.
90) *ibid.*, p.163.
91) ポーリーは一貫して読書や図書館に関わるイデオロギーやそこに作動する権力を研究対象として分析している。そのような政治的な性格を帯びた文化研究は「文化の政治学」として位置づけられる。ピーターブルッカー(有元健, 本橋哲也訳)『文化理論用語集－カルチュラル・スタディーズ＋』新曜社, 2003, p.207.
92) Christine Pawley, *op. cit.* 4) ⑪, p.422-452.
93) *ibid.*, p.425.
94) *ibid.*, p.426.
95) *ibid.*, p.432.
96) *ibid.*, p.433.
97) *ibid.*, p.434.
98) *ibid.*, p.434.
99) *ibid.*, p.443.
100) *ibid.*, p.444-445.
101) *ibid.*, p.446.
102) *ibid.*, p.448.
103) ウェイン・A・ウィーガンド, *op. cit.* 3) ①, p.1-32.; Wayne A. Wiegand, *op. cit.* 3) ②, p.1-13.; Wayne A. Wiegand, *op. cit.* 3) ③, p.314-326.

◆研究例会案内◆

《第278回》

テーマ：オーストラリアの学校図書館
シドニー, ブリスベンの学校図書館視察報告
日　時：2011年3月12日(土) 14：00～16：30
会　場：大阪府立中之島図書館ふれあいルーム
発表者：大平睦美氏(堺市教育委員会)
概　要：2010年8月に全国学校図書館協議会の海外視察に参加した報告である。シドニー, ブリスベンの学校図書館(公立小学校・中学校・高等学校, 私立小学校・中学校・高等学校) を視察することができた。学校図書館に対する人的配置については, 日本と同様に恵まれているとは言えないが, 司書教諭の位置づけが学校内でなされており, 司書教諭がコーディネイト役として, 学校図書館の活用が学校教育の中に位置づけられていた。また, 州政府も学校図書館を活用することが学校教育では重要である, という意識を持って教育政策に取り入れていたことなどを, 現地で撮影した写真とともに紹介する。

《第279回》

日　時：2011年4月9日(土) 14：00～16：00
会　場：大阪市立難波市民学習センター第3研修室
大阪市浪速区湊町1丁目4番1号
JR 難波駅上 OCAT ビル4階
地下鉄四つ橋線・千日前線・御堂筋線なんば駅または近鉄難波駅下車
TEL：06-6643-7010
発表者：鎌田　均氏(アリゾナ大学日本研究司書)
テーマ：図書館のサービス空間：アメリカにおける大学図書館サービス
要　旨：情報テクノロジー, 電子資料の普及が進む中, より多くの図書館資料へのアクセス, サービスがオンライン上で提供されるようになっている。その一方で, 大学図書館へ実際に足を運ぶ利用者の利用のスタイル, ニーズも変化しつつある。この, ヴァーチャルな空間, また場所としての図書館としての観点から, アメリカ大学図書館における図書館サービスの具体例をとりあげ, 現状を検証する。

●研究例会は, 日本図書館研究会の会員・非会員を問わず, どなたでも自由にご参加いただけます。事前の申込等も必要ありません。

NII-Electronic Library Service